

【スケルトンポリプロC開発の経緯】

スケルトンポリプロCの凄さ！を発見したのは全くの偶然です。

当初はオーディオ用ではなく計測器用途での話でした。

小型のポリプロCが見つからないので（具体的に）「40ミリ角のケースに0.33μのポリプロCが2個収まるサイズに出来ないか？」という希望を出したところメーカーが逆に提案してきました。

「ディップ樹脂が厚いので、もしパッケージに収めるのでしたら裸の製品を使われたら如何ですか？これなら何とか希望サイズに収まります。ある程度まとまれば…」ということで相当数作ってもらいましたが、その後、計測器だけでは使い切れずオーディオ用に廻した結果が衝撃的でした！

0.33μとかなり大容量なので試しに入力部のカップリングCに使用しましたがCをスルーしても全く音の差が判別出来ません！何か接続ミスか？と思うくらいで何度か配線を確認しましたがミスはありませんでした。これまでの経験ではどんなに良いCでも僅かな差は出るもので「これはとんでも無いコンデンサー！」と直感しました。（このCのリード線は鉄でしたが音としては全く悪影響はありませんでした。オーディオ屋としては、ある意味意外です！逆に近くにステンや鉄のビスが在ったりすると直ぐに気がつきませんが…。小さなポリプロCで銅リードではハンダの熱によるトラブルが発生しやすいとのことです）

その後、音の良さの検証が進みましたので何種類か別の容量も特別に（高価で且つ「相当な不良が出て問わない」との念書も書かされました！）作ってもらいましたが、これも15年以上前の話で現在はメーカーも合理化が進みスケルトンには全く対応してくれなくなりました。そこで現在は薬品や工具で機械的に外装を剥がしてベースのCを取り出すことから行っています。（現状、多様な容量に対応するにはベストな方法と考えます。

このような工程のためと一般リードタイプではリード部の保護の目的もあり外装が一部残っている商品もありますが音質には殆ど影響ありませんので、ご理解願います）

既に(株)日本オーディオの製品にはSKCを多用していますが今回、ラインナップを拡充し商品化しましたので一般のユーザーにも使って頂ける運びになりました。

スピーカーのネットワーク、アンプのカップリング、チャンネルデバイダー、イコライザー素子…と広い用途での大幅な音質改善をお約束できます。